

[019]生活体験学習研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4763160>

出版情報：生活体験学習研究. 19, 2019-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：



【特集の主旨】

学会20周年の節目の記録

相 戸 晴 子*

1999年9月、「生活体験学習学会実践交流会」を皮切りに、日本生活体験学習学会はスタートした。学会発足の当時は、急激に生活の変容が進行していき、子どもの生活体験不足の影響が身体面、精神面に表出し始め、問題とされてきた時代であった。そのような状況に危機感や問題意識を持った有志が中心となり、この学会は発足した。

本学会では、スタート事業からもわかるように、「実践と研究を拓く」というミッションを中心に据え、実践者と研究者がともに生活体験学習を探究するという学会スタイルにこだわり設立された。生活体験学習実践や研究への大きな期待を背負っていた。発足当時の理事の顔ぶれも、実践者と研究者のメンバーで構成され、以降、その両者の立ち位置を大切にしながら「実践交流会」や「研究大会」の開催、また「学会誌」や「通信」の発行、近年では、「地方セミナー」の共催などの学会活動に取り組んだ。しかし、意義を感じつつも中断を余儀なくされている事業（実践交流会）もある。実践者が学会（研究）にかかわり続けるということは、簡単なことではなかった。しかし、学会としてはこのスタンスは今に至って大切にしている。今後再開の可能性を探りながら、「実践者と研究者」による学会活動の枠組みを残し続けている。

このような経過を経て本学会は、2018年9月学会発足20年を迎えた。理事会では、2018年の研究大会において「学会20周年記念シンポジウム」に取り組むこと、また学会誌19号において「学会20周年の特集コーナー」を設けることが協議され、総会に提案、実施の運びとなった。

「学会20周年記念シンポジウム」においては、実践者と研究者の側面から登壇者を立て、時代の急激な変化による生活変容の現状から生じるさまざまな

生活体験学習課題の大きさを直視するとともに、学会発足20年を振り返り、現在に至る生活体験学習に関する実践と研究の蓄積と到達点、学会の果たしてきた役割の確認を行い、これからの生活体験学習研究への期待や展望などを語り合った。

また学会誌「学会20周年の特集コーナー」では、初代会長の横山会員と2014年から会長を務められた山崎会員から学会20年を迎えた本学会に対する思い、また、現学会長古賀会員からは、「庄内町立生活体験学校」との連携と前年のシンポジウムの内容を中心とした論文、さらに元学会副会長であり「生活体験学校」において30年に渡って通学合宿を実践されてきた正平会員からは、通学合宿や生活体験学習の意義とこれからの方向性、また実践者が（研究者）学会にかかわる意義について実践ノートにまとめていただいた。

さらに、学会の委員会や事務局が発行してきた「通信・事務局だより」のアーカイブ化も試み、本学会誌にCDが収めている。そこでは、実践と研究が特徴の本学会ならではの編集・発行のよさが随所に見られ、学会活動の足跡をより身近に発信・受信できる仕組みとなっていたことがわかった。しかし、ITツールが次々に移行した時代であり、そのデータ収集を担当していただいた学会事務局にはかなりの時間と労力を割いていただいた。

今回の特集では、学会発足20年としたものの、さらに生活変容が進行し続けている最中であり、新たな生活体験学習の課題をとらえることを試みつつ、学会としてどう研究していくかを模索している内容の記録にとどまっているかもしれない。しかし、この記録を通して、生活体験不足という課題は人間にとっては大変重要なテーマであるということ、しかし認識されにくくその課題解決に向けた実践を継続

* 紀要編集部長、宮崎国際大学

連絡先：〒889-1605 宮崎市清武町加納丙1405番地 E-mail: haito@edu.miyazaki-mic.ac.jp

TEL：0985-85-5931 FAX：0985-84-3396

していくことには困難が伴うが、その実践が重要であることがあらためて実感出来たのではないかと考える。だからこそ本学会の存在がこれからますます重要になってくるのではないだろうか。

この特集にかかわれた関係者すべてに感謝申し上

げるとともに、この学会発足20年の記録がこれまでの生活体験学習の研究や実践のふりかえりとともに、これからを展望する一つの材料になることを祈念し、特集の主旨説明としたい。